保育計画成果報告書

法人名等	社会福祉法人　富山国際学園福祉会
施設名	幼保連携型認定こども園　西田地方保育園
報告者（役職）	（　園　長　）　細川　優子
住所・連絡先	富山県富山市西田地方町二丁目 10-30
	☎　076-421-7481 E-mail　nishiden@tkfukushikai.or.jp

○タイトル（保育計画）

「やってみたい！やってみよう！」～チャレンジできる環境づくり～

○主な助成備品

室内ホール大型遊具（あみっこアスレチック）

１．保育計画策定の目的

子ども自らがやりたいことを選び、それらを満足いくまで活動できる環境づくりをめざしている中で、保育園の環境が子ども達にどのように働きかけているかを常に探りながら子ども達と生活している。

保育室や遊戯室、園庭の中で、有効活用されている又はされていない場所・空間、子ども達の好きな場所・集まる場所などを探り検討したところで、遊戯室に焦点をあて考えてみた。

北陸地方に所在する当園は、雨天時や冬期の雪が降る時期は、園庭の固定遊具で遊ぶことができないため、遊戯室を利用した活動が増えるが、大型の遊具は一昨年に設置したクライミングだけで、ダイナミックな活動をするには制限があった。園庭で遊べない時でも遊戯室で子ども達の挑戦しようとする意欲を満たすことができるように、今の環境を生かしながらなんとかできないかを検討した結果、デットスペースになっている場所を有効利用できるのではないかと考えた。子ども達のやりたい！と思う意欲が、今回の大型遊具の設置により遊戯室でも実現できる環境を生み出すことができると考え製作することとした。

今回、助成していただいた大型遊具は、一昨年に設置したクライミングに増設する形で製作していただいた。子ども達の挑戦意欲は高まり、子ども達の大好きな場所となった。

これによって、自由に遊べるゾーンが増え、子ども自身が選んだ活動（遊び）が十分にできる空間と時間の確保ができるようになった。さらにチャレンジしようとする気持ちや協同して活動できる環境が整ったことで、自園の目指す子ども像（＝「やってみたい！

やってみよう！」と思える子ども）となるよう援助し、見守りながら教育・保育をすすめていきたい。

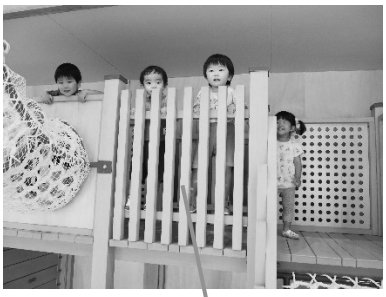
２．具体的な実施内容

自発的な活動を推進するために、活動時間と使用できる空間の幅を広げ、「自分でやることができた」という満足感や、友だちと決まりを守りながら生活し遊ぶことの楽しさを感じられるような友だち同士のかかわりの確保、更には子ども達自身が自分達で考え、ルールを決めながら他者に思いやりの気持ちを持ち、協力して活動できる環境づくりに取り組んだ。

【発達年齢に応じた環境として】

・自分の能力がわかり、やってみようとする。

・発達に応じた運動能力を促すことで、達成感や満足感が得られる。



「わたしものぼれるんだよ」

「やっほー」
「ぼく、ここだよー！」

「ぼくだって！」

「せーの！」
ジャンプだ!!

【挑戦しようとする環境として】

・大きな子ども（友だち）のモデルを見たり、適切な援助で子どもが自らやってみようしたりとする。

・少し難しいと感じるものに出会うことで、挑戦意欲の高まりが生まれる。

「こんな高いところまで
のぼれるようになったよ」

のぼれたことが嬉しくて、
遊具の感触を確かめながら
大きさを確認中の１歳児。

「私もやってみる！
先生、みててね」

「たかーい!!」

【ルールを決めて協同的に活動できる環境として】

・子ども達自身が、遊具を使った遊びを考え、その中でルールを作り出し共通の目的をもって活動する。

A 児：「のぼってもだいじょうぶ？」
B 児：「C ちゃん、おりてきそうだよ」
B 児　（上にいる友だち C 児に対して）
「A ちゃんのぼりたいみたいだから、
ちょっと待っててもいい？」
C 児：「いいよー」

鬼ごっこをしながら…

A 児：「鬼が来るよー」
B 児：「えー！A くん、早くあがってー！」

３．その成果と評価

保育者は、子ども自身が自分のやりたいことができる時間や空間の保障とそれらを見守る存在がいかに必要かを感じ取ることができた。それによって、子ども達はより活動の幅が広がり、生き生きとした姿がみられるようになった。

今まで遊戯室（ホール）では、保育者が、巧技台や可動式大型遊具を設定して活動を展開させることが多く、子どもがやりたい時にやりたいことができる環境ではなかった中で、今回この遊具を設置した。子ども達の「やりたい！やってみたい！」気持ちが途切れることなく、挑戦したり試したりできるようになったことは大きな成果と考える。

また、子どもは夢中になって遊んでいるとき、他人との距離感には無頓着になる傾向があると考えられるが、日々この遊具で遊んでいると、友だちとすれ違う場所や進行方向などに注意する必要があり、自分の身体を認識しながら他者を意識した行動ができるようになったと感じる。友だちとすれ違う時にはどう身体を使って自分の進みたい方向にいくか、また、網のトンネルは一人しか入れないことがわかると、下から登りたい人と上から下りたい人が同時になった時どうするかなどは、子ども達がすべて自分自身で経験して習得していった。子ども達は、自分の身体がどのくらいの大きさであるか、手や足はどこまで伸びるかなど、自分で身体を動かしながら適切な身のこなしやしなやかさを身に付けていくのだと改めてわかった。新しい動きは、最初はうまくいかなくても、何度も挑戦するうちに身体の使い方のコツをつかみ、できるようになっていく。繰り返し楽しめる場として有効な活用ができている。

また、多くの子どもに経験してもらいたいという保育者の思いが、「がんばれ」「〇〇ちゃんもやってみよう！」などと、子ども自身の気持ちを考えない励ましや無理な挑戦になり、怪我や恐怖心につながる可能性があることにも配慮した。そのこともあってか、今のところ怪我につながった事案はない。このことより、保育者の言葉かけや関わりが活動をすすめる上で重要な人的環境となることの重要性も保育者間で改めて共通認識することができた。

今回いただいた遊具は、子ども達に遊具の名前を公募したのち話し合いで「あみっこアスレチック」と名付けられ、子ども達の大好きな場所となり、天候にかかわらずいつでも活動できる空間となっている。

４．今後の課題と展望

気持ちよく、満足して遊んだ体験は、子ども自身の中に必ず残ると考える。経験の積み重ねが大切であり、教育・保育をすすめる中でいろいろな体験・経験の機会をどのように環境として取り入れていくかを常に考えていきたい。今回いただいた大型遊具を活用しながら、今後も子ども一人一人の発達過程を見据え、何に興味を示し何が必要であるかを職員間で話し合い、「やってみたい！やってみよう！」が実現できるよう、人的環境も含めてよりよい保育環境を整えていきたい。

以上